

学生の声楽・合唱分野に関する意識調査

— 12年間の質問紙調査の分析を中心に —

早川 倫子 ・ 虫明眞砂子 ・ 徳田 旭昭*

本研究は、教員養成課程で音楽を専攻する学生を対象に、入学直後に実施した声楽・合唱分野に関する意識調査の分析を行い、その実態を明らかにしたものである。

学生らは大学入学までに、特に行事に関連して集団での合唱活動を多く経験してきている一方で、個々人における学習経験は少なく、声楽や発声の技術的な面で自信がないことが明らかとなった。小中高の歌唱・合唱経験が行事中心であると、表面的な活動に留まって基礎能力が育たない可能性があり、教員養成においては個人の実技力、特に、発声法の知識や技術を育成することが第一に必要であることが示唆された。また、こうした分析結果は、先行研究における結果を再認する形となり、長年の声楽・合唱分野における課題が浮き彫りとなった。

Keywords : 声楽, 合唱, 発声, 意識, 質問紙調査

I. はじめに

明治5年の学制によって、「唱歌」が位置付けられて以降、学校音楽科において、歌唱分野は歴史的に重要な位置付けにあったが、領域・分野の拡大とともに教材、指導内容、発声法等、学校音楽科の様相は変遷してきた。

特に近年の歌唱分野では、平成元年告示の学習指導要領まで半世紀にわたり扱われてきた「頭声的発声」が削除され、それに代わって「曲種に応じた歌い方」、「自然で無理のない発声」が登場し、発声指導の位置付けが大きく変化した。それに関連し、今日まで発声指導や歌唱指導に関する様々な問題が取り上げられている(早川・虫明, 2012)。

また、今日の音楽教科書で取り扱われる歌唱教材は、西洋クラシック音楽、文部省唱歌、ポップス、民謡等、そのジャンルが多岐にわたることから、実際にはそれぞれに適した発声や歌の魅力についてどの程度指導がなされているのか疑問が残る。学校外においても学習者自身は様々なジャンルの音楽を経

験してきており、歌唱の経験の仕方も多様であることから、歌の嗜好性や発声観等にも変化が生じている可能性も考えられる。さらに、合唱部の減少や合唱活動の衰退など若者の合唱離れも指摘されており(高橋・虫明, 2015)、歌唱や合唱の経験そのものが希薄になってきているのではないかと危惧される。

そこで、本研究では、教員養成課程で音楽を専攻する学生を対象に質問紙調査を行い、大学入学までの学校内外での歌唱および合唱の経験度を問うとともに、それまでの経験で培われた歌唱に関する意識についても調査し、その実態を明らかにすることを目的とした。本稿では、平成21年度から令和3年度までのデータ分析を行い、12年の経年における、学生の歌唱・声楽に関する経験度、意識の持ち方等の傾向と、今後の教員養成課程に求められるものは何かについて考察を行う。

教員養成課程の学生を対象にした声楽に関する意識調査については、平本(2019)と中原(2022)の研究がある。

岡山大学学術研究院教育学域 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*岡山県立岡山操山高等学校 703-8573 岡山市中区浜412

Survey of Students' Attitudes toward the Vocal and Choral Fields -Focusing on the Analysis of 12 Years of Questionnaire Surveys

Rinko HAYAKAWA, Masako MUSHIAKI, and Teruaki TOKUDA*

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Okayama Sozan Senior High School, 412 Hama, Naka-ku, Okayama 703-8573

平本は、保育士および教員養成課程に入学した音楽学習経験の少ない学生を対象に、声楽授業の前後で実施した歌うことに関する質問紙調査の分析を行っている。そこでは、歌うことの嗜好性と、声量、音程の正確さ、リズムの正確さ、良い声、発音といった発声や歌唱の音楽的・技術的側面、及び小中高등학교での歌うことの経験に関する15項目について調査している (pp.80-81)。

分析結果からは、歌うことが好きだという学生は、授業前後どちらにおいても9割を超えているが、人前で歌うことについては8割以上の学生が好きではないこと、また声量や良い声、発音の明確さ、思い通りに歌える技術については特に自信がない学生が多いという結果が出ている。

中原は、我が国の学校教育における歌唱時の発声法の習得の不十分さを課題として取り上げ、平本と同じく学生が声楽基礎を学ぶ前後で質問紙調査を実施し、発声法の意識の変化について分析を行なっている。質問紙調査では、「歌う際、声の出し方(発声法)に悩んだことがあるか」、「発声法を学んだことで声の出し方に対する意識の変化があったか」、「発声法を学んだことで声の出し方に改善があったか」、「発声法を学んだことによって楽曲に対する意識や歌い方に変化を感じたか」について4段階の尺度評価を行ない、さらに各設問内容の具体的な例についても自由記述式で回答を得ている。声楽や発声法の困難さを問う最初の質問では、7割の学生が「とてもそう思う」、「そう思う」と回答しており、声の出し方(発声法)に困難を抱えている学生が多い結果となっている (p.178)。また授業後の調査からは、声の出し方に対して意識変化があり、歌唱の仕方にも改善があったと感じている学生がいるという結果が出ている (p.179)。

また、早川・虫明(2012)は、教員免許状更新講習の受講者を対象に実施した事前質問紙調査において、教師らの意識として歌唱指導の難しさ、自信のなさを挙げ、具体的な内容としては特に「発声法」に関する課題が一番多かったことを指摘している (p.61)。

このように、学生においても学校現場の教員においても、発声法の技術の習得は大きな課題となっている。今回の質問紙調査の分析と考察が、こうした課題の背景を探る一助となればと考えている。

II. 質問紙調査の概要

1. 対象

教員養成大学に在籍し「声楽基礎演習」を受講した192名を対象とした。調査期間は、平成21年度～

令和3年度である。

なお、回答は毎年度の「声楽基礎演習」¹⁾第1回目の授業の際に実施した。

2. 設問項目

設問内容は、主に大学入学以前の「声楽や合唱についての経験度」、「歌うことに関する意識」、「唱法等に関する知識」、入学後に「声楽・合唱について学びたいこと」に関する項目で構成される。

具体的な設問項目は以下の表1の通りである。

表1 質問紙における設問項目

- | |
|---|
| 1. 声楽や発声を学んだ経験について |
| 1) ある 2) 少しある 3) ない |
| 1) 2) は、個人レッスンまたは学校授業で習いましたか。その期間も教えてください。 |
| 2. 高校での音楽の選択について |
| 1) 選択した 2) 選択しなかった |
| 1) について、その期間は? |
| 1) について、合唱活動をしましたか?その内容を教えてください。(H25年度以降) |
| 3-1. 小学校からの部活動、サークル活動等の合唱経験について |
| 1) ある 2) ない |
| 1) について、合唱経験の具体例(自由記述) |
| 3-2. あなたの中学校には合唱部がありましたか?(H26年度以降) |
| 1) あった 2) なかった 3) わからない |
| 3-3. 小中学校では、音楽授業の中で、合唱活動や歌唱活動を経験しましたか?(H23年度以降) |
| 1) 小学校 2) 中学校 |
| 4. これまでの歌う経験のなかで印象的だったことについて(自由記述) |
| 1) いい経験 2) よくない経験 |
| 5. 歌うことへの嗜好について |
| 1) 歌うことが好きか はい いいえ |
| 1) について、どのような点が好きか(自由記述) |
| 2) 歌うことに対して、苦手意識があるか はい いいえ |
| 2) について、どのような点が苦手か(自由記述) |
| 6. 音の捉え方(音感)について |
| 1) 固定ド |
| 2) 移動ド |
| 3) 両方できる |
| 7. コダーイメソッドについて |
| 1) 知っている |
| 2) 知らない |
| 1) について、どんなことを知っているか |
| 8. この授業に参加して、あなたは何を得ようと思うか(自由記述) |
| 9. 要望や意見等を書いてください(自由記述) |

3. 分析方法

各設問内容及び回答形式に合わせて、基礎統計量の分析、テキストマイニング、キーワード抽出によるアフターコーディングの手法を用いた。なお、データ収集にあたっては、実態を把握し授業改善に役立てることを説明の上、実施した。分析は、学生の個

人情報を切り離し、データ番号を付与して行った。本稿では、個人情報を取り扱っていない。

Ⅲ. 質問紙調査の分析結果

1. 声楽・合唱に関する経験度

(1) 声楽や発声の学習歴について

声楽や発声を学んだ経験についての基礎統計量については、「ある」と答えた学生が30.7% (59人), 「少しある」と答えた学生が47.3% (91人), 「ない」と答えた学生が21.8% (42人) となっている。

「ある」と「少しある」を含めれば、全体の78%が、声楽や発声についての何らかの学習歴があると読み取れる。一方で、主に音楽を専攻する学生を対象とした結果として見ると、学んだことが「ある」と答えた学生が3割程度しかなく、やや少ないことがわかる。

また、「ある」と「少しある」と回答した学生の中で31.3% (47名) が個人レッスンの経験がある。その内容は、大学受験のためのレッスンが主であり、レッスンの期間は受験前1ヶ月から1年間と回答している学生が多い。

以上のデータからは、音楽を専攻する学生においても、声楽や発声への意識や学習の必要性が低く評価されているのではないかと推測される。

(2) 学校における歌唱・合唱の経験について

①高等学校「芸術（音楽）」の選択について

高等学校で「芸術（音楽）」を選択したかどうかの基礎統計量については、「選択した」と回答した学生は全体の86.9% (167人), 「選択しなかった」と回答した学生は13.0% (25人) であった。9割近い学生が「芸術（音楽）」を選択していることがわかる。これは音楽を専攻する学生を対象にした調査であることが大きい。履修期間については、1～2年が多く、歌唱・合唱に関わる内容は、入学式や卒業式で歌う歌の合唱、校歌の合唱が多く、その後教科書掲載曲の合唱が続く。

ジャンルも、イタリア歌曲、J-pop、フォークソング、讃美歌、ゴスペル、ミュージカル（文化祭）など多岐にわたっている。また、高校の音楽科出身者は、声楽の基礎的な内容として、ソルフェージュ、新曲視唱、コンコーネ、コールユープンゲンなども授業内で学習したとの回答が見られた。

このように回答内容からは多様な経験が見られる一方で、経験度には学校による格差があることも認められた。例えば、前述の様々なジャンルによる多様な歌唱経験と声楽の基礎的な内容については、高校音楽科の出身者に多い (13.7%, 23人) のに対し

て、他の学生では、教科書に載っている曲を数曲歌ったり (34.7%, 58人), 卒業式などの行事で歌う曲の練習をしたりしたとの回答 (16.1%, 27人) が多く見られた。

②小学校からの部活動・サークル活動等による合唱活動・歌唱活動の経験について

小学校からの部活動・サークル活動における合唱活動の有無についての基礎統計量については、合唱活動の経験の「ある」学生が43.7% (84人), 経験の「ない」学生が50.5% (97人) で、割合が拮抗している。

「ある」と答えた学生の活動経験の具体例を分析すると、表2のとおり、高等学校での合唱部等での活動経験が一番多く、小学校での合唱クラブや地元の合唱団での経験が続く。大学での部活動やサークル活動も同数であるが、特に中学校の合唱部等での経験の割合が低いことがわかる。

表2 各学校種における割合

小学校	中学校	高等学校	大学
22人	14人	31人	14人
26.1%	16.6%	36.9%	16.6%

注) $N = 84$

また、その他の回答として、合唱部ではないが、「吹奏楽部の中で合唱をしていた」という回答も複数あり、音楽系の部活動の実態が垣間見られる。それは、次の中学校における合唱等に関する部活動の有無についての回答結果からも推測できる。

中学校において、合唱部が「ある」と回答した学生は14.0% (16人) であり、「ない」と回答した学生は83.3% (95人) であった ($N = 114$)。8割以上の中学校に合唱部が存在していないことから、合唱部の減少が危惧されている状況が、本稿の調査からも追認される結果となった。

③小学校・中学校の音楽授業における歌唱活動及び合唱活動について

次に、小学校および中学校の音楽授業における歌唱活動および合唱活動について、自由記述の内容を分析した。以下の表3のとおり、音楽会や合唱コンクール、文化祭等の行事に向けた合唱練習を授業内で行ったもの（「行事」というカテゴリーで分類）、校歌、今月の歌、共通教材、教科書教材などを授業内で歌ったもの（「授業」カテゴリーで分類）、朝の会・学年集会など授業以外の学校生活の場面で歌ったもの（「朝の会・学年集会」カテゴリーで分類）の大きく3つに分類することができた。

表3 小学校・中学校の授業における合唱活動・歌唱活動の内容

	行事	授業	朝の会・学年集会
小学校	86人	54人	21人
	55.1%	34.6%	13.4%
中学校	98人	56人	2人
	62.8%	35.8%	1.2%

注) N = 156

表3からは、授業における合唱活動が、小学校・中学校ともに合唱コンクールや音楽会等の「行事」のための活動として行われていることが多いことが読み取れる。授業だけの学習内容として行われているのは3割程度にとどまり、音楽科の授業における学習内容の多くが、いかに行事と関連づけられているか、その実態が明らかとなった。

2. 歌うことに関する意識

(1) 歌う経験についての印象

ここでは、歌う経験について「いい経験」と印象付けられているものと「よくない経験」と印象付けられているものについて、分析を行った。その基礎統計量においては、「いい経験」と感じるものがあつた学生は78.1% (150人)、「よくない経験」のあつた学生は21.3% (41人)であった。

「いい経験」として印象的だった自由記述の内容を分析すると、表4で示したカテゴリーに分類された。第一に、合唱コンクール、合唱祭、訪問コンサート、卒業式など、授業外の行事等で歌う「機会」を「いい経験」だと評価する回答が一番多いことが明らかとなった。また、そうした「機会」に関連して、「ホールで歌った経験」、「体育館で歌った経験」といった日常とは異なる「場所」や声の響く「空間」での経験が「いい経験」として印象付けられている記述も見られた。

さらに、「300人ぐらいで歌ったので気持ち良かった」、「何百人という合唱で、ぴったりとハーモニーがあつた時に気持ちが良い」、「合唱はみんなでするものなので完成時の達成感が大きい」、「発表会で合唱をした時全員が一丸となれた」といった回答にあるように、大人数で、あるいはクラス全員で共に歌う経験が「いい経験」として評価されていることが読み取れる。また、そうした共に歌う経験を通して、「ハーモニーが合う気持ちよさ」等の音楽的な経験や、「達成感が大きい」等の感動経験が、「いい経験」として印象付けられていることも認められた。

一方、少数ではあるが、声楽のレッスンなどで個人的な技能が高められたことが「いい経験」として位置づけられている回答もあつた。

表4 いい経験の内容 (カテゴリー分析)

機会	場所・空間	人数・クラス	経験の質/内容	達成感/感動	その他
77人	12人	25人	46人	18人	20人
40.1%	6.2%	13.0%	23.9%	9.3%	10.4%

注) N = 192

次に、「よくない経験」の自由記述の内容を分析すると、一番多かったのは、「音痴で、音程が取れなくて難しかった」、「他の人と声が馴染まなくて落ち込んだ」、「みんなと音程が合わない」といった音感に関する問題によって、歌う経験が「よくない経験」として印象付けられている回答であつた(18名)。また「大きな声が出なかった」、「大きな声で歌えなかった」という声量に関する回答も10名あり、そこには、発声の技術そのものに関する声量の問題と、「歌いにくい」、「みんな声を出さない」という心理的な問題の両側面があることが認められた。その他に、「声変わりして以降歌えなくなった」といった回答や、音楽専攻ならではの事例として、「伴奏ばかりしていて、歌えなかった」といった回答も複数あつた。

以上のように、歌うことについての「いい経験」については、様々な行事等において、みんなで共に歌うという思い出に残るような経験が、「いい経験」として印象付けられているのに対して、「よくない経験」については、個人の技術的な課題によるものが大きいという実態が明らかとなった。

(2) 歌うことに対する嗜好性

歌うことに対する嗜好性に関する基礎統計量については、歌うことが「好き」と答えた学生は97.9% (188名)となっているのに対して、「苦手意識がある」と答えた学生は80.7% (155名)となっている。つまり、ほとんどの学生は歌うことは「好き」ではあるが、「苦手意識」もあるという両局面を持っていることがわかる。

次に、歌うことについて、どのようなことが「好き」や「苦手意識」に繋がっているのかを分析するために、それぞれの自由記述の内容について、KH Coder 3²⁾を用いて、以下の通りテキストマイニングを行った。

①歌うことが「好き」の自由記述に見られる頻出語サンプル数190、文の数227、分析対象の抽出後の総数1110、異なる語の数267であつた。

「歌うことが好き」の自由記述に見られる頻出語のうち、出現回数が10回以上のものを示したのが、以下の表5である。

表5 歌うことが「好き」頻出語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
好き	77	歌	14
歌う	70	思う	14
する	51	人	14
できる	50	なれる	13
楽しい	41	楽器	13
自分	38	スッキリ	12
声	34	ハモる	12
なる	31	歌える	12
表現	25	とても	11
気持ち	16	ない	11
気分	16	ハーモニー	11
気持ちいい	15	音楽	10
合唱	15	他	10

次の図1は、歌うことが「好き」の自由記述にみられる頻出後の関連性を共起ネットワーク図で示したものである。

表5及び図1から、歌うことが「好き」「楽しい」という記述が多いことが読み取れる。その理由は、図1から主に次の4つの視点に分類できる。

一つめは、「気持ち」-「スッキリ」、「気分」-「良い」とあるように、歌うことの心理面に対する効果について、肯定的な評価がなされていることがわかる (Subgraph02)。2点目は、「自分」-「表現」、「楽器」-「違う」-「魅力」とあるように、声による

表現の意味や効果を価値づけている点にある (Subgraph01)。3点目は、「ハーモニー」-「合わせる」-「きれいな」とあるように、音楽的な良さを評価している (Subgraph04)。そして、この3点目は、4点目の、「人」-「一緒」-「歌える」、「合唱」-「ハモる」とあるように、共に歌うことに対する良さに関連する (Subgraph05)。

以上のことから、歌うことが「好き」には、歌うことによる心理的な効果、楽器とは異なる「声」独自の表現力、そして共に歌う楽しさや声を合わせた時の音楽的な美しさが、その要因となっていることが読み取れる。

②歌うことに「苦手意識がある」の自由記述に見られる頻出語

サンプル数178, 文の数199, 分析対象の抽出後の総数1013, 異なる語の数288であった。

歌うことに「苦手意識がある」の自由記述に見られる頻出語のうち、出現回数が10回以上のものを示したのが、次頁の表6である。

次頁の図2は、歌うことに「苦手意識がある」についての自由記述に見られる頻出語の関連性を共起ネットワーク図で示したものである。

図2から、「苦手意識」は、第一に、「声」-「出ない」、特に「高音」-「出ない」によるものが大きいことがわかる (Subgraph05)。それは、「音域」

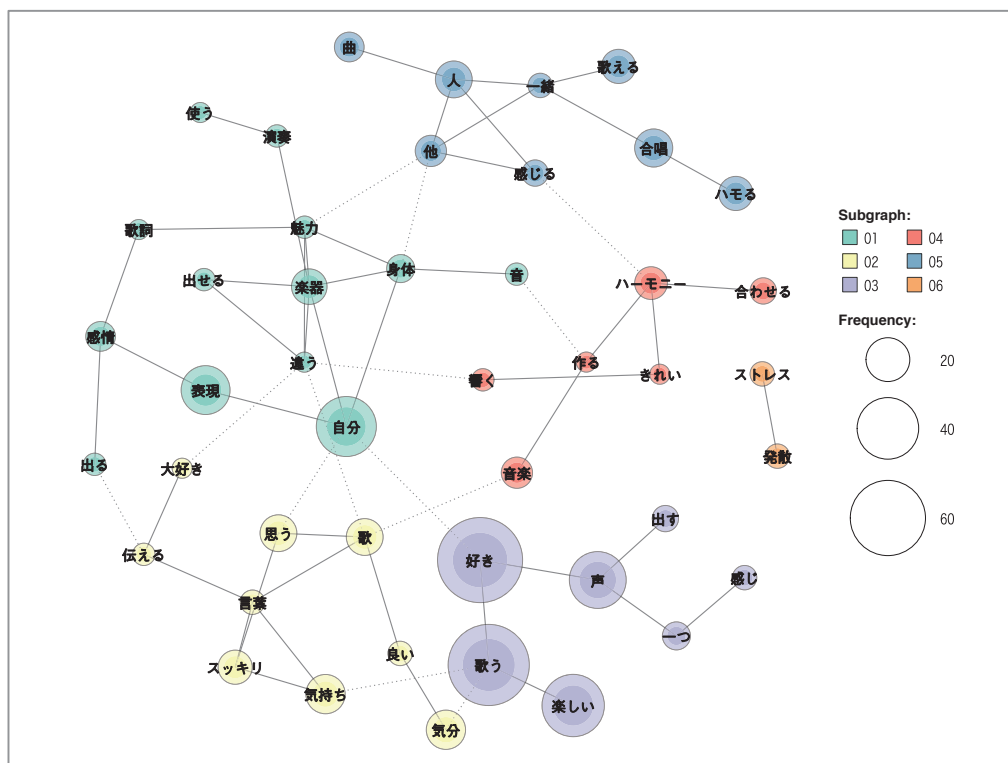


図1 「歌うことが好き」頻出語 共起ネットワーク図

表6 「苦手意識」頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
ない	49	高音	17
苦手	47	出す	14
声	44	あまり	13
歌う	38	喉	13
ある	29	出る	12
音程	27	できない	11
する	26	思う	11
出ない	24	ない	10
なる	22	好き	10
自分	20	少し	10
音	19	人前	10
音域	18	発声	10
意識	17		

－「狭い」や、「低い」－「音」－「歌えない」にも関連する (Subgraph03, Subgraph01)。また、「音程」－「取れない」－「不安」とあるように、音感に関する苦手意識が大きい (Subgraph04)。その他に、「きれい」－「表現」－「できない」という抽出語等もあることから、「苦手意識」に関しては、全体的に歌うことの技術面に関する抽出語が多いのが特徴である。

一方で、「人前」で歌うのは苦手であるが、「歌う」－「好き」にあるように、歌うことそのものについては、嗜好性を持っていることがわかる (Subgraph02)。

この結果は、2 (2) における歌うことの嗜好性に関する基礎統計量の結果 (歌うことが「好き」と

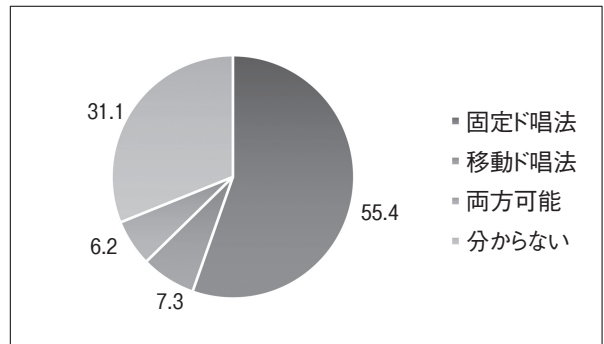
「苦手意識がある」の両局面がある) と一致する。

3. 唱法等に関する知識

(1) 音の捉え方 (唱法) について

2 (2) ②から、音程などの「音感」について苦手意識を持っている学生が多いことが読み取れた。そのような傾向にある彼らは、どのような「音の捉え方」、特に唱法を用いて音を認識しているのだろうか。

以下の図3は、用いる唱法についての基礎統計量を示したものである。



注) N = 193

図3 音の捉え方について

図3から、過半数以上 (55.4%) の学生が固定ド唱法であることがわかる。この原因に関して、小川 (2005) は小学校、中学校の音楽の授業において、移動ド唱法よりも固定ド唱法の方が多く行われている

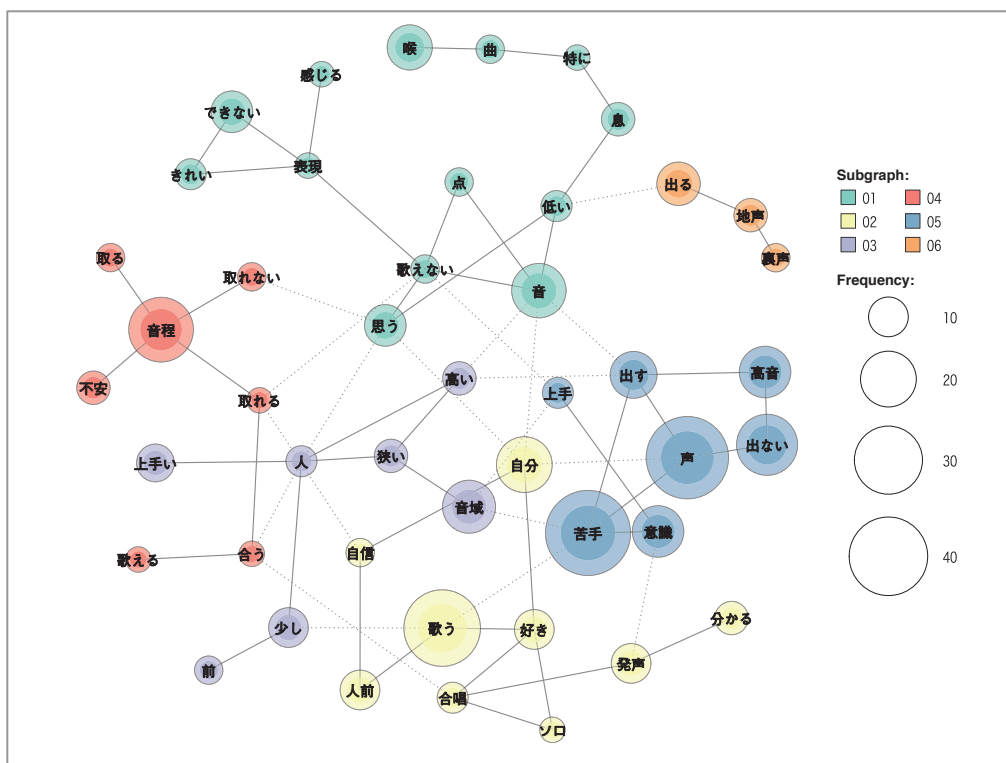


図2 「苦手意識」頻出語 共起ネットワーク図

ることを明らかにしており、加えて、階名唱（移動ドによる歌唱）はほとんど行われていないと述べている。現行の学習指導要領において「相対的な音程感覚などを育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」と定められているながらも、固定ド唱法が大部分を占める背景には、彼らが受けてきた学校教育の課題があるといえるだろう。

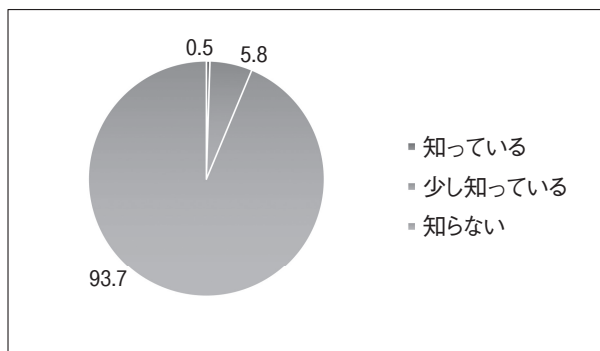
一方、「移動ド唱法」「両方可能」と回答したのは13.5%であり、その数は限定的である。

移動ド唱法とは、各音の音楽的性格を捉えることに優れた歌唱法である。例えば、ハ長調における「ド」の音は主音として扱われ、全体の骨格、安定的な構造をもたせることに寄与するが、変ニ長調における「ド」の音は導音として扱われ、主音に回帰しようとする強固な音響エネルギーを含んでいる。このように、同じ「ド」の音を扱いながらも、基準となる調性によってその音楽的ニュアンス、イントネーションは大きく異なる。

このため、「移動ド唱法」が少ないという回答結果は、前述のような音楽的性格を活かした歌唱学習が音楽の授業の中で展開されていない可能性を示唆しており、相対的な音程感覚や和声感はあまり育成されないのではないかと推測される。学生らが「音感」についての「苦手意識」を多く持っていた背景には、こうした要因があると考えられる。

(2) コダーイ・メソッドの知識の有無

以下の図4は、コダーイ・メソッドの知識の有無についての基礎統計量を示したものである。



注) N = 191

図4 コダーイ・メソッドについて

図4から、ほとんどの学生93.7% (179人) が「知らない」と回答していることが分かる。「少し知っている」は5.8% (11人) であり、「知っている」と回答したのは0.5% (1人) であった。また、コダーイ・メソッドを知っていて、移動ド唱法を習得している学生は全体の3.1% (6人) のみで、コダーイ・メソッドを知らずに移動ド唱法を習得しているが

9.9% (19人) いる。この結果は、コダーイ・メソッドと移動ド唱法とを関連づけて習得した学生がごくわずかしかな存在しないことを示している。

以上の結果からは、移動ド唱法を体得している学生においても、どこまで移動ド唱法特有の学習効果を得られているかは疑わしく、唱法における方法知としてのみ身につけている可能性が高いと考えられる。

(3) 唱法等に関する知識についての考察

コダーイ・メソッドとは音楽教育者で作曲家であるZ.コダーイが考案した教育システムである。幼少期から母語で歌うことを基本とし、移動ド唱法による歌唱を原則とする点が特徴である。

虫明 (2008) は、コダーイ・メソッドが取り入れられている米国の小学校や中学校の音楽授業やハンガリーのコダーイ・スクールを視察する中で、その指導法の一部を日本の合唱教育に活かすことができるのではないかと述べている (p.92)。そして、特に移動ド唱法によるソルミゼーションを、発声練習に取り入れることを提案している (p.98)。実際に、「声楽基礎演習」の授業の中で、コダーイ・メソッドで使用されるハンドサインを用いながら移動ドで繰り返し歌うことによって、音程がとりやすく、ピッチが良くなったと受講生全員が実感していることも示している (p.97)。

前述したように、学校現場では、相対的な音程感覚を育てるために移動ド唱法が求められていることから、幼少期から年齢に応じて、ユニゾン、3度音程、5度音程等のような基本的な和声感を育てる場が音楽授業の中に必要ではないかと考えられる。

もちろん、固定ド唱法では、絶対音による正確なピッチの習得、無調音楽などの最近100年来に生み出された音楽にも対応できる点において非常に有効である。音楽授業では、移動ド唱法と固定ド唱法を発達段階に応じて、また曲の種類に応じて使い分けしていくことが望ましいのではないかと。

4. 歌唱・声楽に関して学びたいこと

最後に、「授業に参加して、何をしようと思うか」について、自由記述の回答を分析し、キーワードを抽出した (文末資料1参照)。

次に、それらの抽出キーワードを分析した結果、その内容は、表7の通り①～⑦の7つのカテゴリで構成された。

表7 7つのカテゴリー

①	技術（声楽・発声に関する技術）
②	知識（声楽・発声に関する知識）
③	表現力（表現する力・伝える力など含む）
④	歌う楽しさ・歌う喜び
⑤	自信（自信をつける・苦手意識の克服）
⑥	指導法（発声・歌唱・合唱の教え方）
⑦	その他（人間的な成長、協調性、思い出、経験）

下の表8の数字は、上記各カテゴリーに該当するキーワードの書いてあった被験者の数を示している。なお、キーワードの抽出及びカテゴリー分類にあたっては、筆者ら3名で行った。

表8 カテゴリー別の抽出割合

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
146人	71人	19人	34人	11人	37人	18人
76.0%	36.9%	9.8%	17.8%	5.7%	19.2%	9.3%

注) $N = 192$

表8より、学生の8割弱が、声楽や発声に関する「技術」を習得したいと答えていることがわかる。「技術」を習得したいと答えている146人のうち、59.5%（87人）が「発声」または「声の出し方」と書いており、発声についての「技術」習得を求めている学生が多いことが読み取れる。

また、「しっかりした声」や「声量のある声」、「響きのある声」、「きれいな声」といったように、発声の質を改善したいと考えていることを示す記述も複数見られた。さらに、「発声」や「声の出し方」の前に、「正しい」-「発声」、「良い」-「発声」、「正しい」-「声の出し方」のように、「正しい」や「良い」を付している割合が25.2%（22人）もあり、どのような「発声」が「正しい」のか、「良い」のか、価値判断できていない実態があることも認められた。

さらに、この結果は2（1）の「よくない経験」の回答結果と、2（2）の「苦手意識」の回答結果に関連し、声楽・合唱分野においては技術的な側面の課題が大きいことは明らかである。

IV. 総合考察

本稿では、学生の声楽・合唱分野に関する意識について、質問紙調査のデータを様々な手法で分析することで、その実態を明らかにしてきた。ここでは、経験度と意識の2つの側面から考察する。

経験度の実態について、基礎統計量から明らかとなったのは、以下の5点である。

【経験度について】

- ① 高校で「芸術（音楽）」を選択した学生は、9割近くいるものの、大学入学までに声楽や発声については、学んだことのある学生は3割程度と少ない。「ややある」を含めると8割近いが、その内容は、短期間における受験のためのレッスンが多い。
- ② 授業における歌唱・合唱活動については、小中高共に、行事のための合唱活動が多い傾向にある。
- ③ 小学校から大学までの部活動・サークル活動における合唱経験については、「ある」学生と「ない」学生の割合が拮抗している。
- ④ 中学校における部活動での合唱活動の経験の少なさは、中学校の部活動に合唱部がほとんどないことが大きな要因である。
- ⑤ 唱法については、固定ト唱法を用いている学生がほとんどであり、移動ト唱法は浸透していない実態から、合唱活動での真の音感や和声感の育成は行われていないことが推測される。

次に、歌うことに関する意識について、自由記述の分析から明らかとなったのは、以下の4点である。

【歌うことに関する意識について】

- ① 歌う経験は「いい経験」、歌うことは「好き」と回答した学生が多く、歌うことについて肯定的に評価している。
- ② 集団で歌うことの達成感や、歌を歌うことそのものの精神的な解放感などの音楽外的要因と、声が合わさった時の気持ち良さ、ハーモニーの心地良さなどの音楽内的要因の両方によって、歌うことが肯定的に評価されている傾向にある。
- ③ 歌う経験における「よくない経験」や、歌うことに「苦手意識」があることの要因は、歌うことの技術的な側面にある。
- ④ 入学後の声楽・合唱についての学習課題として、特に発声についての技術的な課題を習得したいと考えている学生が多い。

以上の経験度と意識の2つの側面から、学生らは大学入学までに、特に行事に関連して集団での合唱活動を多く経験してきている一方で、個人における学習経験は少なく技術的な面で自信がないことが明らかとなった。集団で歌うことの良さは、仲間とともに歌うことで、個人個人の力が引き出されたり、技術的に自信がなくてもカバーされたりすることに

ある。また、集合体での音声効果によって気分が上昇したり、一人では味わうことの出来ない達成感を得られたりする。こうした集団の力で音楽をする経験をしているか、していないかは、教員の資質能力としてとても重要になるだろう。

一方で、小中高の歌唱・合唱経験が行事中心であると、表面的な活動に留まって基礎能力が育たない可能性がある。前述したように個人における声楽や発声の学習経験が少なく、自信のない学生が多いことから、教員養成においては個人の実技力、特に、発声の知識や技術を育成することが第一に必要なだろう。学生らは、実技力をもって指導したいという思いを持っている。ソロで歌える力と合唱で歌いながら指導する力の両方が必要であり（早川ら、2023）、そのための基礎能力の育成が求められている。

本稿における分析結果は、先行研究における結果を再認する形となり、長年の声楽・合唱分野における課題が再度浮き彫りとなった。

—注—

- 1) 「声楽基礎演習」は、平成28年度からのカリキュラムで一部「中等音楽科内容構成Ⅰ」に統合されている。
- 2) 本稿で使用したKH Coder3は、樋口耕一が開発したテキストマイニング用フリーソフトウェアである。<https://kncoder.net/> (最終閲覧 2023/8/31)

—文 献—

早川倫子・虫明眞砂子 (2012) 「歌唱指導における教師力の育成について－免許状更新講習の実践を通して－」, 『岡山大学教師教育開発センター紀要』

第2巻, pp.60-70

早川倫子・虫明眞砂子・長岡功 (2023) 「実践的指導力の育成を目指した複合科目の現状と課題：中等音楽科内容構成「歌唱」領域の授業を事例に」, 『日本教育大学協会研究年報』第41巻, pp.99-110

樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－第2版』ナカニシヤ出版

平本弘子 (2019) 「保育士・教員養成課程における学生の声楽技能修得に関する考察：学生の意識調査から」, 『福山市立大学教育学部研究紀要』第7巻, pp.79-90

岩井正浩 (2004) 「コダーイの音楽教育」, 日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』, 音楽之友社, pp.374-376

虫明眞砂子 (2008) 「児童・生徒の自然な声を引き出す合唱指導について－コダーイ・スクールのMIRACULUM合唱団を事例に－」岡山大学大学院教育学研究科研究紀要』第139号, pp.91-99

中原雅彦 (2022) 「教員養成課程学生における声楽意識調査研究：声楽歌唱発声法を中心に」, 『熊本大学教育学部紀要』第71巻, pp.177-181

小川容子 (2005) 「公教育における音名唱指導の実態－質問紙による移動ド・固定ド唱法の比較」, 鳥取大学地域学部紀要『地域学論集』第1巻第2号, pp.41-53

高橋安喜子・虫明眞砂子 (2015) 「岡山県の中学校における合唱活動に関する考察」, 『岡山大学教師教育開発センター』第5巻, pp.52-61

牛澤賢二 (2021) 『やってみようテキストマイニング (増訂版)』朝倉書店

資料1 歌唱・声楽に関して学びたいこと（キーワードの抽出）

番号	8. この授業に参加して、あなたは何を得ようと思うか。	抽出キーワード
1	自分が声楽を学ぶとともに、声楽の教え方を学びたい。	声楽を学ぶ、声楽の教え方
2	もう一度正しい発声ができるようにすること。声の空気の混じりをなくすこと。	正しい発声（空気の混じり）
3	良い声の出し方や、歌うにあたっての表現力を身に付けていきたいと考えています。	良い声の出し方、表現力
4	もっと表現できるようになりたい。もっとビブラートできるようにになりたい。安定した声が出せるようになりたい。	表現力、ビブラード、安定した声
5	今まで以上に自信をつける。発声法をきっちり身につける	自信をつける、発声法
6	歌や声を出すことの楽しさ!!	歌や声を出すことの楽しさ
7	今まではピアノ伴奏ばかりであり合唱で歌ったことがないので、基礎の発声から身につけようと思う。	発声の基礎
8	発声の知識。歌うことの楽しさ。	発声の知識、歌うことの楽しさ
9	長く歌っても声がかれなかったり、遠くまで届く声が出せるようになりたい。	長く歌っても枯れない声、遠くまで届く声
10	歌うことの基礎と喜びです。(将来)みんなの前で歌えるくらいの自信です。	歌うことの基礎、歌うことの喜び、自信をつける
11	自信をもって歌えるようになりたいです。	自信を持って歌う
12	正しい呼吸法や声の出し方を学びたいと思います。声楽と合唱の声の出し方の違いも学びたいです。	正しい呼吸法、声の出し方、声楽と合唱の声の出し方の違い
13	発声の基本。普段の声も先ほど改善できると先ほどおっしゃっていたので、それも体得したいと思います。学校で子どもに教えるためにも、基本の基本を学びたいです。	発声の基本
14	発声の仕方に興味があります。	発声の仕方
15	歌や声に自信を持ちたいです。そのうえでみんなと合唱を楽しめるようにしたいです。	歌や声に自信を持つ、合唱を楽しめる技能
16	声楽に関する正しい知識。	声楽に関する正しい知識
17	現役のころの声に近づきたいです。とにかく、またコーラスがしたいです。	声楽の基礎、コーラスがしたい
18	良い声を出したい。	良い声
19	(記述なし)	
20	合唱においてどのようなことが大切なのかを学びたい。	合唱において大切なこと
21	合唱の楽しさ。	合唱の楽しさ
22	基礎をとにかく学びたいです。	基礎
23	歌う技術の向上と副免許取得のための単位。	歌う技術、副免許のための単位
24	発声など基礎的なことをより確実に身につけたいです。	発声の基礎
25	歌の技術向上など	歌の技術向上
26	合唱のすばらしさを実感し、歌う楽しさを再認識したいです。	合唱の素晴らしさ、歌う楽しさ
27	発声方法を得たいです。授業の中で提供していただいていることを全て吸収したいです。	発声方法
28	発声の基礎や合唱について。	発声の基礎、合唱
29	合唱の楽しみ方	合唱の楽しみ方
30	発声についての知識と技能	発声の知識、発声の技能
31	発声法や表現方法の基礎を学び、もっと声を響かせたい。	発声法の基礎、表現方法の基礎、声の響き
32	発声法	発声法
33	声楽、発声に関する知識を広く学び、歌うことの理解を深めていきたい。また、歌の表現力を身につけたい。	声楽・発声の知識、歌うことの理解を深める、歌の表現力
34	音楽の知識を少しでも体得できれば。	音楽の知識
35	合唱の練習法、音楽の解釈方法	合唱の練習法、音楽の解釈方法
36	発声の基礎を固めしっかりと声を出せるようにしたいです。合唱の楽しみを味わいたいです。	発声の基礎、しっかりと声、合唱の楽しみ
37	正しい発声または呼吸法。小学校における歌唱活動の指導方法	正しい発声、呼吸法、歌唱活動の指導方法
38	美しい声を身につける。他の人の声を聴いてしっかりとあわせる。指導者としてのスキル。	美しい声、他者の声に合わせる、指導者としてのスキル
39	私は教師になって音楽の授業では、合唱、歌うことに力を入れようと考えています。どうやら生徒に合唱を通して学んでほしいことを伝えられるのかをこの授業で学びたいです。生徒に伝えられるためにも、自分の技術も向上させたいです。	合唱を通して生徒に伝えられること、自身の技術向上
40	合唱の発声方法を学び、生徒に分かりやすい授業をするためにはどうするかのヒントを探す。	合唱の発声方法 生徒へのわかりやすい授業の方法
41	正しい発声方法の取得、声楽についての様々な知識	正しい発声方法、声楽についての知識
42	(記述なし)	
43	自ら合唱の楽しさを知って、将来の指導に役立てたいです。声の出し方を学びたいです。	合唱の楽しさ、声の出し方
44	自分の声に自信を持てるようになりたいです。今まで合唱などの歌う活動をあまりしていなかったため、合唱の楽しさや面白さを感じたいです。	自信を持てるようになる、合唱の楽しさ・面白さ
45	歌の魅力や楽しさ技術向上など、声の響きをきれいにしたい。	歌の魅力・楽しさ、技術向上、声の響き
46	私は歌うとき、どうしても下あごに力が入るので、それを改善したいです。あと呼吸、息の使い方を習得したいです。	歌う時の下顎、呼吸、息の使い方
47	声楽の指導法のヒントなど。	声楽の指導法のヒント
48	普段の生活でも使える声。	普段の生活でも使える声
49	グリークラブ以外の発声についての知識。小学校で音楽を教えるうえでの心得。	発声の知識、小学校で音楽を教えるための心得
50	発声の仕方、音楽の表現の仕方	発声の仕方、音楽表現の仕方
51	上手く声が出せるようになりたいです。楽しく歌う。	声の出し方、楽しく歌う
52	歌をきちんとやったことがないので、練習をして歌について知れることが多くなること、歌を歌うことが少しでも上達すればよいと思っています。	歌についての知識、歌う技術の上達
53	声楽を学んだことがないので、基本をおさえ、以前とは違った歌い方ができるようになりたい。	声楽の基本、歌い方
54	声を出すということを学びたい	声を出すこと

学生の声楽・合唱分野に関する意識調査

55	歌うことは楽しいということを感じる。声楽に関する知識がないので、発声などの基礎的なことを学ぶ。	歌うことの楽しさ、声楽の知識、発声の基礎
56	発声の仕方など、基礎的なことを学び、歌うことの楽しさを今以上に知りたいです。	発声の基礎、歌うことの楽しさ
57	発声法、表現方法 歌に関する知識	発声法、表現方法、歌に関する知識
58	正しい発声の方法を学びたい。	正しい発声の方法
59	歌で表現できる力を養い、今よりさらに歌うことが好きになれたらと思います。	表現する力、歌うことを好きになる
60	発声技術。歌うことの楽しさなど。	発声技術、歌うことの楽しさ
61	歌唱に対する基本的な技術と表現	歌唱の基本的な技術、歌唱の表現
62	楽に歌えるようになること。あと単位	楽に歌えるようになること、単位
63	合唱をする喜びを得たいと思っている。	合唱する喜び
64	発声の方法や、また、自分の声の質をしりたい。	発声の方法、自分の声の質を知りたい
65	もっと高い音がきれいにれたり、もっと音をとばす感じを得たい。	高い音の出し方、音を飛ばす方法
66	合唱向きの発声のコツを知りたいです。他の人の声もよく聞いて、調和したアンサンブルができるようになりたいです。	合唱の発声、調和したアンサンブル
67	正しい発声の仕方を習得しようと思っています。	正しい発声
68	正しい発声法を知って、曲を上手く表現できるようになりたい。	正しい発声法、上手な表現
69	歌を通しての表現力や声量	表現力、声量
70	歌が苦手な子にどう指導するのが良いか、少しでも参考になるものが欲しいです。	歌が苦手な子どもへの指導法
71	声楽の基礎をきちんと身につけること。歌曲にたくさん触れて、表現する楽しさを学びたい。	声楽の基礎、歌曲のレパートリー、表現の楽しさ
72	将来、生徒に歌うことの楽しさや歌が上手くなることの喜びを教えたいので、発声や合唱を通してそれらを学びたい。	生徒に歌うことの楽しさや歌が上手くなることの喜びを教える方法
73	低中音域の発声の方法を知り、澄んだ声を出せるようになりたいと思っています。	低中音域の発声方法、澄んだ声
74	歌のレッスンを本格的に受けたことがないので、自分の声がどれくらいなのかを知りたい。そして、みんなで合唱をして得る喜びや達成感を味わいたい。	自分の声について、合唱の喜びや達成感
75	正しい発声練習を身につけたい。アカベラやアンサンブルの楽しさを知って、人に伝えられるようになりたい。	正しい発声練習、アカベラ・アンサンブルの楽しさ
76	私は人と合唱したりハモったりするときに音程が合わなかったり声質が合わなかったりするのですが、この授業で人と合わせることが多いから、少しでもこの苦手を克服していきたい。	合唱でのハモリ、音程や声質の合わせ方
77	自分自身のスキルアップはもちろんだけど、教育者になる自覚をもって授業を受けたい。自分が今までやってきた指導とか、そういうことをふまえて考えてみたいです。	自身のスキルアップ、教育者になる自覚、これまでの指導の振り返り
78	前期の合唱の時に自分に足りないと感じた、発声の基礎。	発声の基礎
79	個人的な声楽のスキルアップ。合唱指導を見据えて、合唱の基礎を知る。	声楽のスキルアップ、合唱の基礎、合唱指導
80	将来教職に就いたとき、発声練習、方法、合唱の指導等を生徒に伝えていける知識、スキルが身につけられたらと考えています。	発声練習、合唱の指導の知識とスキル
81	正しい発声歌えるようになりたいです。高音が出せるようになりたいです。	正しい発声、高音が出せるように
82	発声法などを自分で教えられるようになりたい。	発声法の指導方法
83	教師になるにあたって子どもたちに音楽を教えるために必要な知識や技量	音楽を教えるための知識や技量
84	歌を楽しんで歌うことと、もう少ししっかりした声で歌えるようになりたいです。	歌の楽しさ、しっかりした声での歌唱
85	声量と音程の正確さを鍛えたいです。	声量、音程の正確さ
86	声楽についての知識や発声の基礎、合唱をする意味などを少しでも得ていきたいです。	声楽の知識、発声の基礎、合唱をする意味
87	歌が上手になって、自身をもって人前で歌えるようになりたい。	歌の技術向上、自信をつける
88	合唱に必要な技術技能を少しでも向上させることはもちろん、合唱をすることの楽しさを身をもって感じたい。	合唱に必要な技術・技能の向上、合唱することの楽しさ
89	正しい発声の仕方です。	正しい発声法
90	専門的な発声法を学び、歌う喜びと合唱の楽しさを知り、それを伝えられるようになりたい。	専門的な発声法、歌う喜び、合唱の楽しさ 上記を伝える方法
91	表現できるような声量など。歌い方の基礎	表現のための声量、歌い方の基礎
92	(記述なし)	
93	声楽、発声についての基礎的な知識	声楽の基礎知識、発声の基礎知識
94	もっと歌う楽しさを学びたいと思います。免許取得を目指す以上、生徒にそれを伝えられるようにしたいです。	歌う楽しさ、生徒へ伝えられるようにする
95	ユニコンのために先生にレッスンを受けさせていただいたとき、言葉をもっと伝えるために歌を歌いたと感じました。学校で何を大事にして教えたらよいのかも知りたいし、そのためにすこしでも、自分の技術を高めたいです。	言葉を伝える歌い方、学校で何を大事に教えるか、自分の技術向上
96	声楽の基礎（発声、息の仕方）	声楽の基礎（発声・息の仕方）
97	自分の合唱スキルを上げるための方法	合唱スキル
98	歌が上手になりたい。声をよくしたい。音感をよくしたい。	歌の技術向上、声をよくしたい、音感を良くしたい
99	音程の正しい発声の基礎を身につけたい。	正しい発声の基礎
100	正しい発声。表現力	正しい発声、表現力
101	正しい発声	正しい発声
102	きれいな発声	きれいな発声
103	声楽のきちんとした発声方法や表現力	発声方法、表現力
104	個人の声楽のレッスンでは学べなかったことを学びたいです。	個人の声楽レッスンでは学べなかったこと
105	技術の向上（音程、声量、発声）	技術の向上、音程、声量、発声
106	良い声の出し方。自分の特性。単位	良い声の出し方、自分の特性、単位
107	正しい歌い方と発声の基礎知識を学びたいと思っています。	正しい歌い方、発声の基礎知識
108	教師になったとき、子どもたちが歌を楽しめるにはどうすればよいか	子どもたちが歌を楽しめる方法

109	声楽の基礎をしっかりと学びたいと思います。また、アンサンブルなど様々な経験をして歌の楽しさをさらに実感したいです。	声楽の基礎、アンサンブルの経験、歌の楽しさ
110	歌に関する基本です	歌に関する基本
111	発声法と合唱の指導法について学びたい	発声法、合唱の指導法
112	正しい発声法を身につけて、声楽らしい歌い方ができるようになりたいです。	正しい発声法、声楽らしい歌い方
113	声楽や発声を学ぶ機会がなく、苦手な分野なので、しっかり基礎を身につけたいです。	声楽の基礎、発声の基礎
114	少しでも歌うことに自信を持てたらいいなと思っています。また、正しい発声法についても学びたいです。	歌うことの自信、正しい発声法
115	歌う前の準備はどのようなことをしたらよいのかを学びたい。	歌う前の準備
116	きれいな発声歌声の出し方や、声楽に関する知識	綺麗な発声、歌声の出し方、声楽の知識
117	自分が歌えるだけでなく、歌や発声について教えることも考えられるようにすること。	自身の歌唱技術、歌や発声の指導について
118	少人数で1曲作り上げていく過程でどうやったら協力して一つのことを作り上げていくことができるか、その方法	少人数で1曲を作り上げる方法
119	小学校教諭になるにあたって、音楽教育において大切なことを考えようと思っています。	音楽教育において大切なこと
120	声楽専攻だからこそ基礎を大事にしなければならないと感じているので、自分の発声法をしっかりと見つめ直し、本当に自分にあった発声ができているかを学びたい。	声楽の基礎、発声法、本当に自分にあった発声
121	自分自身が中学の教師になったとき、自信をもって教えることができる技能と知識を得たいと思っています。	自信を持って教えることのできる技能と知識
122	声楽の原点からしっかり学び表現や響かせ方、伝え方などを身につけたいです。また、指導するときにどのような点をみていくか学びたいです。	声楽の原点、表現、響かせ方、伝え方、指導の視点
123	声楽の基礎、合唱の基礎	声楽の基礎、合唱の基礎
124	合唱をするにあたっての基礎。発声の仕方。歌う楽しさ	合唱の基礎、発声の方法、歌う楽しさ
125	きれいな発声の方法を知りたいです。	綺麗な発声方法
126	きちんとした発声方法を身につけて、合唱の授業に向けての土台作りをしたい	発声方法、合唱授業の土台作り
127	幅広い音域	幅広い音域
128	しっかりとした声で、ちゃんとした発声を身につけたいです。	しっかりとした声、ちゃんとした発声
129	小学校の先生になるうえで子どもたちに合唱の魅力やすばらしさを伝えたいです。また、自信をもって歌えるようにしたいです。	子どもたちへの合唱の魅力の伝え方、自信を持って歌う
130	歌に対しての基礎	歌の基礎
131	(記述なし)	
132	力まず自然に出せる声、歌の中に抑揚をつける技術	自然な声の出し方、歌の中に抑揚をつける技術
133	歌うことを好きになる	歌うことを好きになる
134	楽な発声と音量、音色の豊かさ	楽な発声、音量・音色の豊かさ
135	少人数のアンサンブルについて、バランスや声の合わせ方等を勉強したいです。	少人数のアンサンブルでのバランスや声の合わせ方
136	発声の基本を学びたい	発声の基本
137	教員免許取得のため	免許
138	将来、歌の指導ができるように	歌の指導ができる技術
139	自信をもって小学校で教えられるように声の出し方などを学びたいと思っています。	自信を持って教えられる技術、声の出し方
140	基礎的な発声法を体得し、子どもたちに対する指導方法を身につけたい。音楽を楽しむ。	基礎的な発声法、子どもたちへの指導法、音楽を楽しむ
141	歌うことの楽しさを知る	歌うことの楽しさ
142	発声の正しい方法を理解して、声量も出せるようになれば嬉しいです。みんなで楽しくできればさらに嬉しいです。	発声の方法、声量、楽しく学びたい
143	発声の方法など、私が教員になったときに自分がちゃんとできて、教えられるようになるための知識を身につけたいです。	発声の方法、教えられる知識
144	教育面に少し得るとしています。	教育面
145	子どもたちに合唱の教える際の留意事項や、みんなが楽しめるようにどのようにしたらよいのか、自分の声量（発声法）も上達させたい	合唱を教える際の留意事項、みんなが楽しめる方法、自分の声量、発声法
146	発声方法、力が入らないで歌えるようになること	発声方法、力が入らないで歌える方法
147	自分の声を聴きつつ周りの声も聴いて合わせる。発声の基礎をもう一度やりたいです	他者の声への合わせ方、発声の基礎
148	正しいのどの使い方、姿勢ができるようになること	正しい喉の使い方、姿勢
149	発声の仕方や姿勢などを身につけて、正しく歌えるようになりたい。また、学んだことをきちんと自分のものにして、将来指導できるようにしたい。	発声の方法、姿勢、正しく歌える、指導できるスキル
150	安定して通る声の出し方を学び、不得意である聴きとりやすい声も鍛えたい。ロングトーンで声が震えるもの原因を知り、解決したい。	安定して通る声の出し方、聞き取りやすい声、ロングトーンでの声の震えの解決
151	知識を得て実践できるようになりたいと考える。	知識の習得、実践スキル
152	歌うこと、合唱の基礎、声楽の楽しさ	歌うこと、合唱の基礎、声楽の楽しさ
153	演劇部の活動、個人での歌唱にプラスになる発声法を身につけたいと思う	発声法
154	正しい発声法と合唱をする機会	正しい発声、合唱の機会
155	発声法や正しい歌い方を少しでも学び身につけて、歌により親しみたい	発声法 正しい歌い方、歌に親しみ
156	声楽、発声の基礎	声楽の基礎、発声の基礎
157	来年の合唱の授業や、これからの経験のための基礎を身につける。	合唱のための基礎
158	歌への苦手意識をなくしていきたいです。	歌の苦手意識の克服
159	子どもにとって魅力的な発声を見つけてできるようにしたいです。少し、歌の指導をできるようにしたいです。	魅力的な発声、歌の指導法
160	ピッチ、バランスを聴く力、表現力	ピッチ、バランスを聴く力、表現力
161	基本的な発声や音程感覚	基本的な発声、音程感覚
162	さらに自分の技術を伸ばしていきたいと思っています。	技術向上
163	発声の効果的なやり方など	発声の効果的なやり方

学生の声楽・合唱分野に関する意識調査

164	歌を通して何かを伝えることができる力を得たいです。自己表現の大きな手段として音楽が存在すると思います。歌うことが楽しいと生徒に思ってもらえるように、楽しんで音楽と向き合いたいです。	歌で伝える力、自己表現、歌うことの楽しさを伝える方法
165	人前で歌うのが好きじゃないので、好きになれるように、発声を良くしたい。	人前で歌う苦手意識の克服、発声
166	自分の声を少しでも良くするヒントを得たいです。	声をよくするヒント
167	基本的な発声の仕方を学んで、声が飛ばせるようになりたいです。	基礎的な発声、声が飛ばせるように
168	基礎的な声楽の知識や技術	基礎的な声楽の知識、技術
169	歌いたくてたまらなくなる音楽の授業ができる先生になりたいので、声や歌の基礎を学んで、歌いたくてたまらないような経験をしたいです。	声や歌の基礎、歌いたくてたまらないような経験
170	音楽の知識、思い出	音楽の知識、思い出
171	音楽の知識があまりにないので、身につけたい。より楽しく、より上手に歌えるようになりたいです。	音楽の知識、歌唱の技術向上
172	歌で言えば、自分の歌声には息が多くつきすぎているので、それを改善したい。	発声法（息が多くついていることの克服）
173	歌唱力、子どもへの正しい授業の方法	歌唱力、正しい授業の方法
174	音楽に対する知識はもちろん、心の部分、人間的な成長がしたいです。	音楽の知識、人間的な成長
175	綺麗な声の出し方を学ぶ	綺麗な声の出し方
176	歌の知識、技術、歌の教育方法	歌の知識、技術、歌の教育方法
177	子どもたちにどのように楽しく正確な歌唱法を教えられるかということ	楽しく正確な歌唱法の教え方
178	響く声と協調性	響く声、協調性
179	生徒たちに歌の楽しさを分かってもらうために、まずは自分が楽しさを知り、それを伝えられる力。	歌の楽しさの習得、歌の楽しさを伝える力
180	どのようにしたら、良い歌の指導ができるのか知りたいです。	良い歌の指導方法
181	音楽の指導方法を学びたいです。	音楽の指導方法
182	音楽の知識や技術的な面はもちろん、音楽の美しさを感じられる豊かな心を得たいと思います	音楽の知識、音楽の技術的な面、音楽の美しさを感じられる豊かな心
183	声楽についての知識や声の出し方等	声楽の知識、声の出し方
184	声楽や発声について詳しく学んできたことがあまりないので、まずは基礎から学んでいきたいです。歌うことに対する苦手意識が少しでも減るようにかんばりたいです。	声楽の基礎、発声の基礎、歌の苦手意識の克服
185	合唱を本格的にするのは小学校以来なので、合唱の基本をもう一度ちゃんと学びたいです。	合唱の基本
186	合唱の基礎知識を得ようと思っている。	合唱の基礎知識
187	美しい発声方法、ビブラート、みんなも自分も楽しく演奏すること。	美しい発声方法、ビブラード、みんなも自分も楽しく演奏する
188	声楽の基礎的なことを習得する。	声楽の基礎
189	自分の声を使って自由に表現できるようになりたいです。	自分の声で自由に表現する力
190	発声の方法、歌うことの楽しさをもっと得たい	発声の方法、歌うことの楽しさ
191	私は今までピアノを習ってきて、声楽や他の楽器への知識が少ないので、幅広い知識を身につけて色々なことに挑戦したいです。	幅広い知識
192	音楽教員の免許を取得したいです。前回、今回の授業で先生方の紹介で音楽について熱い思いをもっておられることを感じ、今まで知らなかった音楽の深い部分を学びたいと思いました。	免許、音楽の深い部分